

「…ふえっ！？せん、ぱい？」

俺の腕に後ろから抱きすくめられた小柄な女生徒は、驚いたように声を上げる。

対して、俺はと言えば、大した動揺は無い。幾度となく想定した状況だったせいかな、思った以上に思考は冷たさを保っていた。なのに体は芯から熱せられたように火照っていて、文字通りの冷えのぼせだ。温度差で吐き気がする。

「嫌、いやです、よう…」

顔を真っ赤にして声だけで抵抗する美咲。こちらの様子から、これから何が起こるのかを悟ったのだろう。体を小刻みに震わせる姿は、俺の嗜虐心を掻き立てた。

「うぐ、ん、ああ…」

膨らみかけの胸を制服の上からまさぐると、美咲はわずかに声を上げる。

「や、くすぐったいから、やめて、」

俺の腕を掴んで、拒絶の意思表示をする美咲。それを振り払うように、より激しく美咲の上半身をさすってやる。

「ん、はっ！うあ、やめて、下さい、せんぱい、」

制止を無視して美咲を抱き上げ、置いてあった長机に横たわせる。

腕をばたつかせて抵抗していたが、少し強めに手首を握ってやると、怯えたような目でこちらを見ておとなしくなった。

「うん、そう。抵抗しないほうがいい。声も出さない方がいいよ。こんなとこ、誰かに見られたく無いだろ？」

美咲の瞳に絶望の色が浮かぶ。涙まで浮かべ始めたが、泣きわめいたりはしないだろう。泣く時は声を殺してめそめそと泣くに違いない。そういうやつだ。

手際よくブレザーとシャツを脱がせてゆく。美咲は顔を強くつむっている。

ブラの下から手を素肌に這わせる。ブラも、一枚の布からできたワンピースタイプのそれで、美咲の体がいかに未熟かを実感する。

「い、やああ…」

美咲の乳房に指を絡める。わずかに隆起しているだけの胸の頂点には、それでも、雌としての本能に従って勃起した乳首があった。

つい、と立ちあがって主張するそれを、指でさする。

「ふうう、う、ああ、だめ、なのお」

誰かに触られたことなどないだろう場所を触れられ、吐息交じりの声を上げる美咲。

するり、とブラを上にかくし上げる。真っ白な胸元の、対になった桃色のそこに、無意識にむさぼりつく。

「っ！あ、あっ、だめ、だよお、せんぱい、やめてえ…」

舌の上で乳首を転がす。未発達とはいえ、女としての機能を果たしているらしいそこは、汗の味とは違う、けれど明らかに美咲の身体から分泌された体液の味と、においがした。

空いた手でもう一方の乳首をつまみ、弄ぶ。

「や、強く、しないで、下さい」

諦めたのか、上半身への愛撫の快感に気付きだしたのか、それは行為自体の拒絶ではなかった。言うとおりに、なるだけ優しくペッティングを続ける。

「う、ふうう…、あ…、ん…」

うすめに開いた美咲の瞳は惚けてきている。ここまで順応が早いとは思わなかった。ためしに軽く、乳房を手のひらで包んでみる。

「やあ、ああ…」

自分が何をされるか分かったらしく、怯えるような声を出す美咲。

初めは軽く、胸を揉みほぐしていく。

「ん、ん！あう、うう…」

体をぴくん、ぴくんと反応させながら行為を受け入れる美咲。

次第に手に力を込める。未熟な乳房だったが、十分な柔らかさのそれに、俺の指が絡む。

「やだあ、そんなに強く、しないでください、せんぱあい…」

顔を移動させて、美咲の首筋に唇を這わす。

くう、くう、と、美咲は喉で声押し殺す。それは羞恥心から来るものか、快感から来るものか。多分、両方なのだろう。

乳房への愛撫も同時につづける。それはどれほどの快感なのか、体の痙攣の反応は大きく、頻繁になってきた。

背中に手をまわし、美咲の上体をほんの少し持ち上げた。

「せん、ばい？」

真っ赤な顔をしながらも、怪訝そうな顔を向けてきた美咲の唇に、外からくわえこむようにしてくちづけた。

キスの味、甘いとかなんだとか、そんなのウソだと実感する。実際は無味だ。けれど、明らかに自分のものでない唾液が侵入してくるのを感じる。

温度も粘度も、味も匂いも俺のとは違う美咲の唾液が舌にまとわりつく。

軽く唇を重ねた程度でこれだ。舌を入れたらどうなるのか、と思い、美咲の口内に舌を侵入させる。

「ん、んふう、んん…」

美咲は鼻息と共に喉を鳴らし、怯えながらも俺の温度に感じ入る。

意外にも、俺の舌を唇で包み込むようにして美咲は応える。

美咲の中に入った俺の舌を、歯先でこり、こり、と甘噛みし、熱い舌と唾液を絡ませてくる。

舌と唾液が互いの口内で往復し、絡み合い、掻き混ぜられる。くちゅくちゅという響きが頭の中に響く。

唇を離す。間に唾液が糸を引き、途切れる。

もう一方の手をスカートの下、下着の中へと潜り込ませる。

生えかけの陰毛が指先に触れるのを感じる。熱く蒸れかえった美咲の恥部は冗談のようにふよふよと柔らかく、ぴっちりとは閉じた大陰唇は、どこが割れ目なのか分からないほどだった。

「やだよう、せんばい、怖いからあ…」

体験版は以上となります。続きは本編をお買い求めの上、お楽しみください。